

ONE LOVE 通信 53号

2014年12月14日発行

2014 年も終わろうとしています。今年はあまり目立った変化がなかった年だったなあ。というか、常にお尻に火がついていたような一年だった。2年続きの洪水の被害は、それを修理するために多くの時間を費やし、また経済的に大きな痛手を負った。だから以前は雨音を聞くのが大好きだったけれど、この頃はすぐに洪水に結び付けてしまうので、雨が降ってくると、心臓がドキドキしてしまうようになった。来年は穏やかに過ごせますように。願い事はたくさんあるけれど、ひたすら望むのは心が穏やかでありますように。ただそれだけ。



【材料がもっとほしい!】

この通信が発行される頃、日本はクリスマスモードいっぱいのものであろう。ルワンダはカトリック人口が多いので、クリスマスは彼らにとっても大きな出来事である。しかし南半球のクリスマスは、雪が降る中トナカイに乗ったサンタクロースがやってくるような、幻想的な部分は全くない。

もちろん町中はクリスマスの飾りつけをする。クリスマスツリーを飾ったり、サンタクロースの格好をしているルワンダ人を見かけたりする。が、やはり黒人のサンタクロース姿は、どうもピンとこない。世間一般で見慣れているようなクリスマスの風景は、どうにも西洋諸国で作り上げられた風景なのである。

さてワンラブ、今年も一年無事に終えることができそうである。もっとも「無事に」という表現が適当であるかはわからない。ワンラブ通信でも何度も書いているが、2年続きの洪水の被害は、精神的にも、経済的にもとても痛い。そしてその痛手は今も続いているというのが現状である。

それでもいつものように義足を作り続けなくてはいい

ない。だって患者さんは毎日やってきますからね。

義足の材料・工具、そして機械。壊れてしまったもの、使えなくなってしまったものがたくさんあり、ただでさえ材料が足りないと思っていたのだが、輪をかけて足りなくなっている。

ルワンダとブルンジで義足を作り始めて一番の問題は、その材料が国内ではほとんど手に入らないということだ。輸入するしか方法がないのである。何とか手に入る材料は、患者さんの障害のある部分の型を取るための石膏の包帯、そしてかろうじてその型を作るための石膏の粉である。しかしそれも常に市場に出回っているというわけではなく、やむを得ず闇ルート(!)で手に入れなければならないこともしばしばだ。

ここで材料が手に入らないと、起こってくる問題は大きく分けて3つ。

- ① 今すぐここで義足がほしいという人に、すぐに対応ができない場合がある。もちろんワンラブとして、材料の在庫を多少は持っているが、あくまでも患者さんの症状によって材料を使い分けなくてはいけないので、持っていない材料も少なくない。

Bibi真美のルワンダ・ブルンジ記
ケデラには、子供の頃障害者の施設で 第41回
一緒に育った幼なじみがいる。



ワンラブの活動が始まった時、彼も一緒に
スタッフとして働いて くれた。
一人娘を育てながら...



しかし、彼は、給料を全て
酒につかってしまう毎日...。
体はボロボロだった...



今年になって、彼の娘が訪ねてきた。



彼が酒を
断つことは難しい。
けれど、お前を助けること
はできる。
うちで働いてほしい。



彼の娘は、ゲストハウスの管理から掃除まで、一生懸命働いている。



最近、彼は電気回路の修理の
仕事を、7ツツでやることに。
親子2代で
頑張らなさい!



- ② 材料を輸入しなくてはならないので、費用が余計にかかる。インドの材料を使うことも多く、その材料自体はそれほど高価なものではないが、それを買に行かのために交通費・宿泊費・滞在費がさらにかかる。もちろん輸送費もかかる。そしてそれをルワンダに持ってきた際に、免税の措置が取られなければ、輸入税までかかってきてしまう。
- ③ それら材料を買付けに行った場合、更なる時間のロスができる。大抵はケニアに買付けに行くのだが、そこで材料を探したり、通関のための書類を作ったりしなくてはならないため、どうしても往復2週間弱かかってしまう。さらにルワンダで免税の措置を取る手続きを始めるのだが、どこかの役所も同じように、仕事のペースは遅い。下手をすると税関から取り出すのに1か月以上かかってしまう。そして買い出しに行っている間は、ルワンダでの仕事は停滞しがちとなってしまふ…。

などとにかく困ることだらけなのだ。この状況は、97年から義足を作り始めた時と、ほとんど変わりが無い。あれから18年が経つが、相変わらずルワンダで手に入る材料は限りなく少ない。

現在ルワンダ政府も、義足材料を政府が確保し、それを個々の義肢製作所に販売するという方法を取ろうと試みているが、まだ調査の段階で、実現するのはかなり先の話のような気がする。



こんなふうに、材料を並べてすぐに取り出せるようにしています。日本の人たちが寄付してもらった義足を再利用すること多いです。

ルワンダ国内の義肢製作所は、97年の時点より数は増えたが、どこも同じような問題を抱えているようである。ついこの間、義肢装具士の集まりがあり、みんな口をそろえて材料の手に入り難さを訴えていた。そしてさらに声を大きくして訴えているのは、政府からの支援が非常に少ないということだ。

私たちの活動も、99年と2000年にルワンダ政府から2度資金援助を受けたが、それ以降はない。だから今の活動を支えているのは、例えば日本の皆さまからの資金援助であり、現地で運営しているレストランやゲストハウスからの収入なのである。

ルワンダは大虐殺があったため、支援を必要としている対象がたくさんある。例えば夫を失った未亡人、夫が刑務所に入ってしまった女性、虐殺の被害に合い自立困難な人たちなど。もちろんそれ以外にも高齢者の問題、医療の問題、貧困の問題など、あげて行ったらきりが無い。そんな中に障害者たちも含まれてくるのだが、彼らに対する支援は、非常に少ないというのが現実である。

こうして活動を20年近く続けていると、さまざまな現実が見えてくる。しかしやはりもっとほしいのは、政府からの支援である。障害者支援のための予算をもっと確保してほしいし、それを行っている団体に対する便宜なども図ってもらえれば、もっと活動はやりやすくなるのに…。

例えば先に書いたような、義足の材料を輸入した場合、もっと簡単な手続きで免税にしてもらえると、義足を必要としている障害者が待たされることなく、義足を手に入れられるようなシステムを作るとか…。

今、ワンラブで義足を作るときには、可能な限り政府に義肢製作にかかる費用の6割を負担してもらえよう、その都度地方自治体に手紙を書いている。そしてそこがOKしてくれれば製作に取り掛かるという方法を取っているのだが、なかなか政府が作ることをOKしない。つまり政府自体も義足を作るための予算を持っていないので、作れないのである。だから必要としている人たちは山ほどいるにもかかわらず、実際に義足を手に入れる人はごくわずか。私たちも自分たちのできる範囲で、資金をやりくりして彼らに義足を作っているが、限度がある。またもしも政府が6割負担をOKしたとしても、手紙を渡してから返事をもらえるまでに1年以上かかる場合もある。

だからそんな部分を政府がもう少し検討してくれれば、全くありがたいのだ。

この2年間、洪水被害を修復することで頭がいっぱいだったが、来年は以前のように政府にいろいろ働きかけ、障害者福祉問題についてもっと考えてもらうように交渉する時間を作りたい。そうしないといつまでたっても、障害者の立場は良くならないし、だってこれって本来は政府が考えなくちゃいけないこと。

よし！来年は少し外に向けて声を出そう！この数年間、中のことばかり気を留めてしまっていたから。はい、来年の目標、決定！

【良かれと思っていても…】

義手を作ったクリスティーンが、ワンラブのレストランで食材の在庫管理をする仕事を始めましたと、前号でお伝えしました。

しかし残念なお知らせです。

彼女はいつの間にか仕事を辞めてしまいました。いつの間にかという言い方をしたのは、理由があります。8月に彼女はワンラブブランドにあるホールを使って、結婚式を挙げました。残念ながらその時ガテラも私もルワンダを不在にしていたので、結婚式には参加できませんでしたが、滞りなく式は終わったとのことでした。

しかし結婚式が済んでからも、彼女は仕事に出てきません。3日経って、連絡を入れてみました。「あら、結婚式を挙げる前に、2週間有給休暇がほしいって、事務には伝えてあるわよ」と言う。！！そんな話聞いてないぞ！慌てて事務にそのことを聞くと「いや、私たちもそんなことは聞いていない」

ついこの間仕事を始めたばかりで、そんなに長い「有

給」休暇などあげられない。しかしめでたく結婚をしたのだから、そんな野暮なことを言っではいけないのか？いろいろ葛藤した結果「ならば1週間だけ休暇をあげる」と言うことにした。

しかし休暇が明けても出てこない。やはりここでも3日辛抱した。しかし黙ってしまうわけにもいかないの、また連絡をした。すると「仕事に行く途中にバイクで事故にあって、治療をしている」とのこと。???だったらなぜすぐに連絡をしてこない?なんとなく、この話胡散臭い。

そしてそれから待てども待てども彼女からは連絡なし。私から連絡をすべきだったのかもしれないけど、基本的に去る者は追わずという性格なので、そのままにしてみました。

だから「いつの間にか仕事を辞めた」という表現になるのであります。

しかし彼女のこの態度は、正直がっかりした。義手を作ったとき、彼女は仕事がほしいと言っていた。そして彼女ができる仕事が見つかったので、誘った。

仕事を始めてからの彼女は、本当のところ、あまり有能ではなかった。何度も同じミスをする、そのミスを指摘するとふてくされてしまうのだった。また仕事の態度もあまりよくなく、遅刻は日常茶飯事、果ては無断欠勤なども目立った。だから私自身も彼女と働きながら、いろいろ苦悩した。どうしたら仕事態度を変えることができるのか？どうしたらミスをしないようになるのか？最初は穏やかにそのミスを指摘しても、何度も重なると私も限界になる。そしてつい怒鳴ってしまったりする。怒鳴った後は自己嫌悪。ただあまり長くは続かないかもしれないなと思ってい

た。

そしてこの結果である…。



こんなふうに気持ちよく、肩を抱き合えたのになあ。
ああ、あなたは今どこで何をしているのでしょうか？

私たちとしては、彼女が自立できるようにと思って、仕事を提供した。でも彼女の思いは私たちとは違っていただようである。結婚をして、もしかしたら旦那さんが稼いでくれるお金だけで二人の生活を成り立てることができるのかもしれない。それはそれでめでたいことだが、素直にめでたいとは思えない自分がいる。

障害を持った彼女が仕事を得るのは、残念ながら健常者より厳しいはずだ。そんな現状を知っていた彼女だから、仕事を得たら、人一倍一生懸命やってくれると思っていた。でもそれは私の勝手な理想の押しつけだったようである。

それ以来彼女には一度も会っていない。道端でばったり会った時に、私は果たして笑顔で挨拶ができるのだろうか？なんだか自信ないな…。

この活動をしていて、時々感じるのは、こちらが良かれと思ってしていることも、相手にとっては必ずしもそうでないこともあるということ。それともこれは親切の押し売りなんだろうか？

相変わらず悩みは尽きない…。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【親子二代の絆】

俺にも幼なじみがいる。子供の頃、障害者の施設で一緒に育った奴らは、今でも付かず離れずの付き合いをしている。

しかしその幼なじみの中に、肝臓を壊しているにもかかわらず、酒を手放せない奴がいる。そいつはワンラブが97年に活動を始めた時、事務をするスタッフとして一緒に働き始めた。自分の家を持っていなかった彼は、義肢製作所の裏を改造して、何とかマットレス一枚が敷けるようなスペースを作り、そこで生活しながら仕事をしていた。だが給料が入るとすぐに酒を買ってしまう。当時、奴は男手ひとつで、小さな女の子を育てていた。が、奴は子供のためのミルクも買わず、食料も買わず、給料はみ〜んな酒に使ってしまうのだ。見かねて俺も近所の人も、ミルクを買った。だが結局どうにもならず、子供は別れた奥さんに引き取られ、奴は仕事も辞め、酒びたりの生活に突入していった。

その後何度か見かけ、見るたびに顔色は悪くなり、喘息の持病も出てきて、体はボロボロだった。死ぬのも、そう遠くないなと正直思っていた。

そして年月は過ぎ、今年になってあの時まだほんの小さい

子供だった彼の娘が俺を訪ねてきた。「うちのお父ちゃん、相変わらずお酒ばかり飲んでいる。そのせいで体はもうひどい状態だ。どうか助けて。」彼女の期待に応えたいのは山々だが「俺は何度もお前の親父に酒をやめろと言った。でも残念ながら、奴は酒をやめることはできないよ」と答えるしかなかった。だが「俺はあいつを助けることはできないけど、お前を助けることはできる。うちで働いて、そのお金で親父の面倒をしっかりと見てやってくれ。」と付け加えた。

そして彼女は今ここで働いている。ゲストハウスの部屋の管理から掃除まで、ろくに休まず、一生懸命働いている。

そんなある日、車を走らせていたらバス停に奴が立っていた。真美が目ざとく彼を見つけ、駆け寄る。「あんたの娘はうちで一生懸命働いている。あんたもいい加減親父らしい振舞いをしなさい！」そして数日後、奴は杖をつきながら、俺のところに来てきた。彼は昔から電化製品の回路を直す仕事をしてきたが、今その仕事をここでしている。

だから彼らは親子二代でワンラブで働いているということになる。これから奴がどう生きていくのか、俺にはわからない。でも娘を悲しませないように、少しでも父親らしく生きてくれればと、願うのみである。

【脱げた義足】

ワンラブのスタッフの面白話。彼は義足を履いている。エボッドという名前の彼は、昼間は電気技師として、ワンラブランド内の電気修理をし、夜はレストランで音楽係として働いている。お客さんのためにいかした音楽を選ぶ、簡易DJのような存在ですね。

レストランは夜遅くまで開いていることも多く、従業員が家路につくのは、夜中を回っていることも多い。

ルワンダは他のアフリカ諸国より治安はいいというもの、やはり夜中は物騒である。ある日、彼はいつものようにレストランを閉め、家に向かっていった。毎日、義足を履いた足で、てくてく家に帰るのだ。

すわ！

その時彼の前に立ちはだかる男が一人。

「ついに来たな！」エボッドはとっさにそう思ったらしい。

男は「つべこべ言うな！お前が今仕事帰りだということは知っている。金を持っているだろう。さっさと金を出せ！」と叫び、エボッドに足払いをかけた。

倒れるエボッド。

そして足払いをかけられた彼のズボンから、スポッと義足が脱げて飛んでった！

それを見た男「うわ～！足がもげた！足払いをかけただけなのに！うわ～！」そう叫んで一目散に逃げて行ったようである。

めでたし、エボッドは何も盗られずに、盗人から逃げ切ることができたのである。

服の泥を払いながら「義足を履いているということは、大変なことばかりではない」そうつぶやいたとか。

いやはや、本当に義足のおかげで助かったエボッドでありました。



紹介します！ワンラブのスタッフ

8月に日本に義肢製作の研修に旅立ったクリストフ。

どうやら日本を満喫している模様であります。フェイスブックをやっている彼から、時々連絡が入ります。

しかし内容はいつも週末のことばかり。肝心な義足製作の方はどうなっているのか、こっちが聞いても答えません。唯一研修のことで連絡があったのは、彼が自分で作ったというコルセットの写真。多分親方から手取り足取り教わったのでしょう。写真で見る限りはきれいに出来上がっているけれど、本当のところは親方に聞いてみないとわかりません。

その代りフェイスブックによく載せられているのは、週末に誰々とどこそこのレストランでご飯を食べたとか、誰と会って何をしたとか、そんなことばかり。

11月には研修先の寮で行われた、それぞれの研修生が自分の国を紹介したり、踊りや料理を披露したりするパーティのことも載っていた。

う～ん、私たちが知りたいのは、研修のことだぞ。きちんと勉強をしているのか？遅刻をしないで、毎日研修先に通っているのか？

しかしフェイスブックに載っている彼の写真を見る限り、もしかしたら今までの研修生の中で、一番日本ライフを楽しんでいるのではないかとたくさんの人に囲まれ、あるいは女性にも囲まれ、ニコニコ笑っているぞ。そして結構いろいろな日本の食べ物もチャレンジしているみたいだぞ。

これも彼の愛される性格のなせる業だ。物腰の柔らかい彼は、たくさんの人に好かれる。彼が怒った姿は見たことがない。だから写真の彼もいつも微笑んでいる。



他の研修員と楽しんでいる様子。今回の研修員には、同じアフリカであるケニアからの女性もいるようです。

まあいいか。研修のことの連絡がなくても。だって彼はこんなに日本に馴染んでいる。う～ん、しかし彼の目的は研修である。遊びまわることではないはずだ。

またしてもここでもう一度様子をうかがい、場合によっては注意しようかと悩んでしまうのであります。



今号の患者さん

また義手を作っています。今度は男性。虐殺の時に、左の手を切られてしまいました。今までずっと義手なしでの生活をしてきたそうですが、やはり手がほしいということで、製作開始。

しかし義手の材料は在庫としてほとんど持ち合わせがありません。だから材料で困ったことがあると、よく相談をさせてもらっている日本の〇社に連絡を取りました。

手の切断部の寸法、そして残っている手の寸法を取ります。そして自分たちの記録として、写真を撮ります。

材料の注文をするときに大切なことは、肌の色を指定すること。日本人の場合は自分も含めて、大体それなりに色はわかるのですが、彼らルワンダの人たちの肌の色は本当に様々です。闇夜の中のなすびのように、本当に真っ黒な人もいますし、「あら？この人本当にルワンダ人？白人じゃなくて？」と思わせるような肌の人もいます。だから本人にも色見本を見せて選んでもらうし、念には念を入れて、日本の会社へ彼の手の写真を送ります。

しかし日本で黒い肌色の注文はあまりないらしく（仕方ありませんね…）、その会社の本社であるドイツへ注文して、そこから直接こちらに送ってもらうことになりました。ちなみに今回はその方の所属している仕事場から、義手の材

料代が支払われるとのことです。

待つことしばし。やっと届きました。やはり新しい材料はうれしいです。私だけでなく、ガテテやアシエールたちも材料を見ながらわくわくしているのが感じ取れます。

再度患者さんに来てもらって、型を取ります。そこでも写真を撮ろうと思って「写真撮ってもいい？」と聞くと、なんとなく嫌そうな顔つき。もしかしたら自分のその部分を見られたくないのかもしれませんが。しかしこちらとしては記録の写真がほしい…。あまり無理を言ってもいけないので、ちょこちょこ撮って終わりにしました。



写真を撮られるのがいやそうだったが、無理やりとった写真。記録も大事なよ〜。

そしてこれを書いている今、ほぼ完成。あとはもう一度こちらに来てもらって、最後の仕上げをするのみ。しかしこれにちょっと時間がかかっている。とりあえず手付金として義手代の半分の支払ってもらったのだが、残りの半分を出す許可が、なかなか仕事場から得られない。こちらとしてはいつまでも手元に置いておく必要もないので、さっさと渡してしまいたいが、渡してしまうと多分残金を払わずに去っていきそうだ。

と言うわけで人質ならぬ物質（ものじち）としてまだここに置いてあるのである。年内には本人に渡してしまいたいぞ！

【とほほ…だけど未来もあるかな？】

ルワンダに限ったことではないが、どこかの国を歩いていると、非常に頻繁に「マイフレンド」と声をかけられることが多い。

ふと振り返ると、そこにいるのは全く面識のないあんなちゃん、もしくはおじさんのことが多い。

そして大抵「いや、実は困っていて…」と言うように話が續いていく。困っている内容は人さまざまだが、よくあるパターンとして、自分の家族が病気もしくは死んでしまったのだがお金がなくて、治療（お葬式）ができない、学校に行きたいのだがお金がない、嫁さんに子供が生まれるのだがお金がないなどのお金がないバージョン。それから仕事をくれバージョン。そして全く理由もなく金をくれバージョン。

あるいはその声をかけてきた人物が知り合いだったとしても、ほぼ内容は同じである。呆れてしまうのは、〇〇が死んでしまったバージョンであるが、確かこの人は3年前に母親を亡くしたと言って、私たちからお金をもらったのではないかと思う人物が、今日また「母親が死んでしまったけど、お金がないから葬式が出せない」と言っているではないか？なんだと！お前には母親が二人いるのか？と言いたくなる。この人はお金がほしいために、母親を2回死

んだことにしているのである。こうなると、もう怒りを通り越して笑ってしまう…。そしてこういうパターンに一度ならず、2度3度と出会ってきた。

だから私は町で声をかけてくるルワンダ人を全く信用していないのである。

それからストリートチルドレン。比較的ルワンダにはストリートチルドレンは少ないと思うものの、それでもいる。彼らは日銭を稼ぐために、町を歩いている人に声をかける。相手はルワンダ人であったり、外国人であったり。そして何がしかのお金を稼いで、住処に戻るのである。

しかしやるせないのは、外国人にお金を乞うときは「ギブミーマネー」と英語で話しかけてくるのだ（フランス語の時もある）。それ以外の英語など全く話せないくせに、その文だけは英語で言うのだ。

私は日本の戦後を知らないのではっきりしたことはわからないが、もしかしたらその頃日本の子供たちがアメリカ兵を見ては「ギブミーチョコレート」と言っていたのと同じ感覚なのかもしれない。

子供たちがそう言って近づいてくるのは、何とも言い難い精神的なプレッシャーを受ける。

だけど基本的には私は彼らにタダでお金をあげない。日本人はこういう場面に慣れていないこともあるだろうし、あげたところで一時しのぎに過ぎないと思うからだ。でもルワンダ人は結構小銭などを渡している。これは単純に助け合いの精神があるからなのか、それともその姿に自分の身近な人をオーバーラップさせているのか。

そんなわけで私は減多に乞うてきた子供にお金をあげないが、最近方針を変えた。つまりタダでお金をあげることはしないが、一仕事したら報酬を払いますよという姿勢だ。

この間市場に行ったとき、子供が「お金ちょうだい」と言ってきた。ちょうど小腹が減っていたので「あそこに置いてあるバナナを一房持ってきて。」と仕事を頼んだ。いそいそとおいしそうなバナナを持ってきた。「いくら？」「わかんない」「お店のおばさんにいくら聞いてきて」「800フランだって」「オッケー、じゃ、これ1000フラン。お釣りもらってきて」200フランを持ってくる子供。「はい、この残りの200フランはお駄賃」

それを遠目で見ていたルワンダ人が、一通りのやり取りが終わってから、私のところにやってきた。「なんだ、あの子にたかられていたのか？」「いや、そうじゃなくってお金をくれて言ってきたから、その代りに仕事をしてもらってお駄賃を渡した」と言うと、そのおじさんは「そうそう、仕事をしたらお金が手に入るということを子供に知らせるのは大切なことだな」と言って去って行った。

だからルワンダには、意味もなくお金をせびるとほほ…の大人もたくさんいるが、その傍らで一生懸命働こうとしている子供たちがいるということも事実なのである。



日本事務所より

私は何度も見る夢がある。夢と言っても、夜見る、あの夢だ。

一つは数学の試験を受けている夢。目の前に答案用紙が置いてあるのだが、ほとんど解けていない。しかも残り時間はあとわずか、と言う状態の夢。夢の中で、これは夢だ、この年になって数学の試験を受けているはずがないとわかっているのだが、非常に焦っていて、焦れば焦るほど頭の中が真っ白になってパニックになっている。そしてはっと目が覚める。目が覚めて、なんだやっぱり夢じゃないとホッとしている。なぜ数学の試験なのかわからないが、とにかく数学なのだ。

もう一つの夢は、母親もしくは父親の出てくる夢だ。私は中学の時に母親を亡くした。父親は6年ほど前に亡くなった。その二人の夢を時々見るのだが、内容や場所はさまざまである。

でも必ず夢に出てくる母親や父親は、病気で余命いくばくもない、あるいは病の床で臥せているという状態なのだ。それがわかっていて、夢の中で「ああ、もうすぐ死んでしまう。どうしたらいいのだろうか？」と不安で押しつぶされそうになっているのだ。夢の中で泣き叫んでいることもある。そして目が覚めると、案の定枕が濡れていることもある。

母も父も病によって命を失ったが、少なくとも亡くなってしまいうまには多少なりとも時間があり、心の準備をすることができたはずだ。それなのに母の死に至っては、もう40年近い年月が経っているにもかかわらず、そんな辛い夢を見る。

そして思う。心の準備をすることができた私でさえ、その死からまだ立ち直れないのに、ルワンダの大虐殺の時、何の罪もなく、突然身内を殺されてしまった人たちの心の中は如何ばかりか…。今年は大虐殺から20年、一つの節目ではあったと思うけれど、彼らの心の葛藤は今も続いている。

そんな彼らと、来年に向けてまた出発です。皆さま、どうぞ応援してください。よろしくお願いします。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信52号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（7月～11月）

7月	円
8月	円
9月	円
10月	円
11月	円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	36本
装具	12本
杖	74本
車いす	4人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？

お正月にたくさん買ってしまった年賀状や書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思しますので、ぜひお譲りください。

【新たなプロジェクトのお知らせ】

1997年の開所以来、ずっと義足を作ってきました。洪水にあってから患者さんたちのデータがなくなってしまったので、正確な数がわからなくなってしまいました。のべ8000人近い人たちに義肢装具・杖・車いすなどを提供することができました。これもひとえに皆さまのご協力のおかげです。本当にありがとうございました。

さて実は来年から新たなプロジェクトがスタートします。以前から交流のあった東北福祉大学の先生と作戦を練りながら、障害者にパソコンを教えるというプロジェクトが決定！

ありがたいことに資金はJICAから支給され、多分1月末ころには実際に生徒に教え始めることができそうです。

私はパソコンの知識を持ち合わせていないので、日本から女性が一人やってきて、運営やら何やらを進めることになりました。今はその準備段階。

授業はワンラブランド内にある建物を利用して行われます。しかしながらそこは住居として建てた場所なので、改築工事をします。とにかくそこを直さない限り、授業は始まりません。現時点でスタートが少々遅れてしまっているの、年末年始の休暇は返上して、突貫工事を行わなくてははいけなさそう…。

こうして今年の年末も穏やかに終えることは出来なさそうですが、もうこれは運命として受け止めるしかありません。

この教室で学んだ人が、2016年にフランスで行われるアピリンピックに参加できるよう、がんばりま〜す！

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

* 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

**書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。
ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。**

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信53号 2014年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

